

栃木県下野市御鷲山古墳の小札甲

－ 2 列円頭形と 1 列偏円頭形の組み合わせ－

うち やま とし ゆき
内山 敏行

はじめに	4 2 群小札の特徴
1 御鷲山古墳について	5 その他の小札など
2 御鷲山古墳出土小札の概要	6 位置づけ、組み合わせの性格
3 1 群小札の特徴	おわりに

墳長 85m の前方後円墳から出土した古墳時代後期末の鉄製小札を再報告・検討する。緘孔 1 列偏円頭形の附属具小札には肩甲（袖甲）の部品があり、膝甲なども含む可能性がある。緘孔 2 列円頭形小札はおそらく甲の本体小札で、緘孔 4 個の小札は草摺部、緘孔 5 個の小札は胴部の可能性が高い。「富木車塚型」または「金鈴塚型」の小札甲か、その関連型式と考える。倭系の 2 列円頭形小札甲に、外来系の 1 列偏円頭形小札附属具を組み合わせる事例と推定した。外来系附属具を倭で製作した工人、あるいは舶載品の存在、使用者と朝鮮半島社会との関わりなどを考えてゆく必要がある。

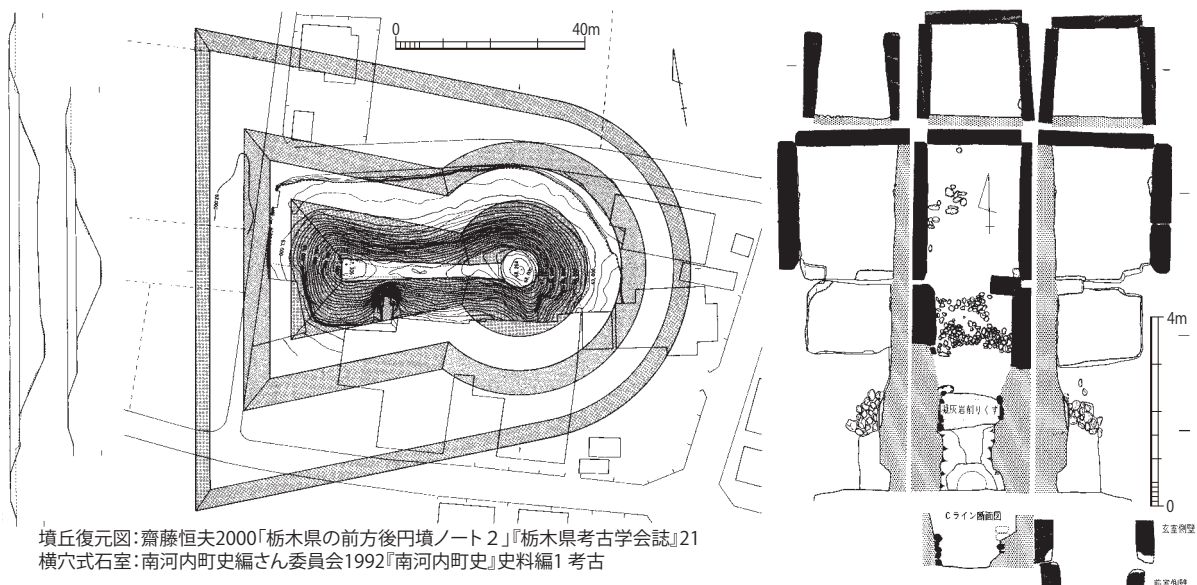
はじめに

栃木県下野市教育委員会が保管する御鷲山古墳出土の鉄製小札を再報告する。発掘調査と報告の時点では形状や孔をよく確認できなかった資料が、錆落としによって観察できるようになることはよくあり、これもその事例である。樹脂含浸処理は行われていない。市町村が合併する前、今から 30 年以上前の出土資料で、X 線写真の有無もよくわからないが、現状で観察できる情報を報告する。

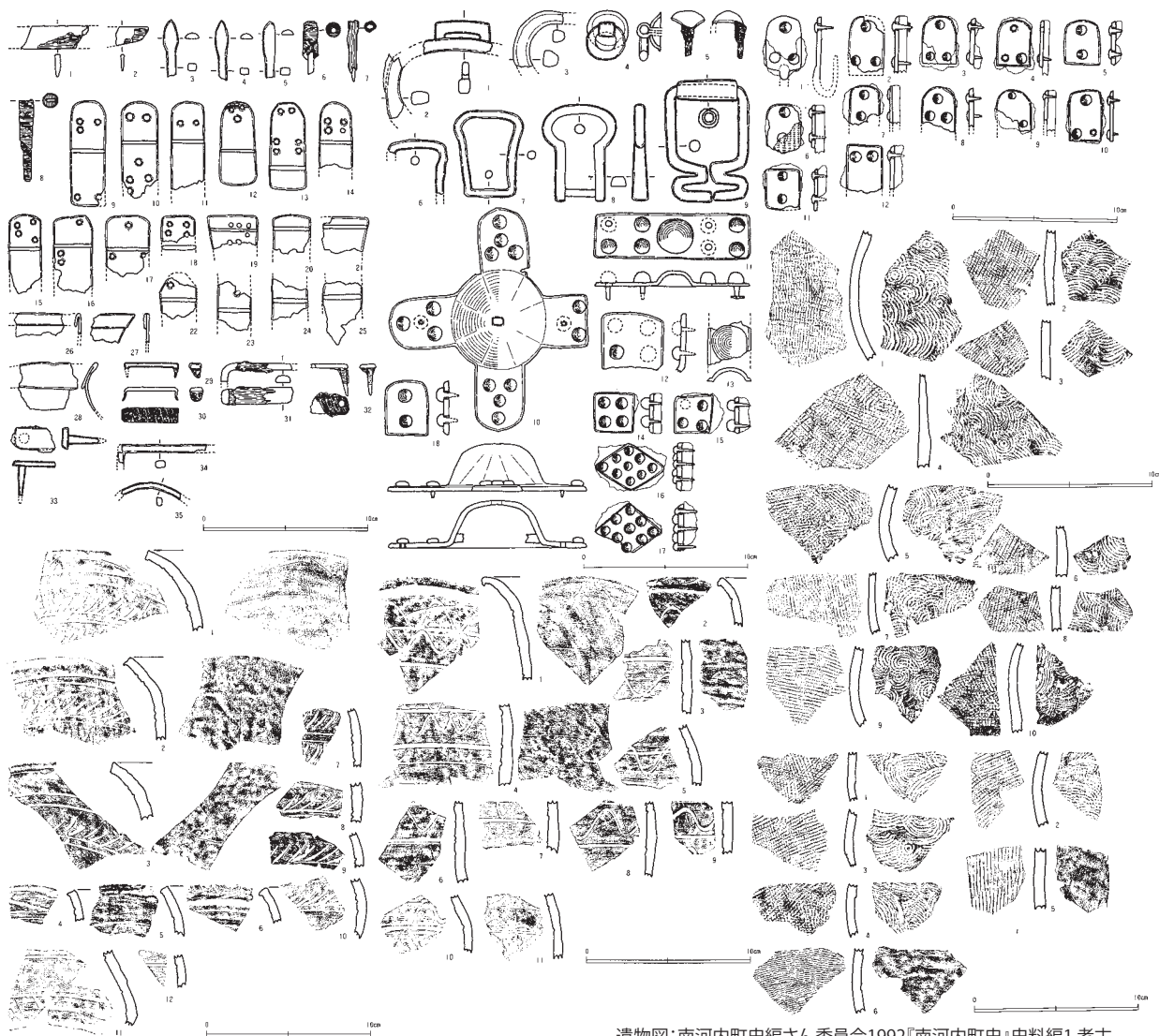
1 御鷲山古墳について

御鷲山古墳は、栃木県下野市薬師寺に所在する古墳後期末の大形前方後円墳である。墳丘周囲の工事立会結果をもとに検討した齋藤（2000）により、墳丘長 85.0m、後円部径 53.5m、後円部高 7.3m、前方部高 6.4m、第一段平坦面幅 4.5 ～ 7.0m、周堀幅 9.5 ～ 10.0m、周堀を含めた総長が 104.5m で二段築成と復元されている（第 1 図左）。『南河内町史』編纂にともない、前方部に所在する凝灰岩切石一枚造りの横穴式石室（第 1 図右）周辺が調査されて、小札、馬具（大型矩形立聞造素環轡・釣金具・辻金具・帯飾金具・しおで・鞍飾鉾・かこ）、鉄鏃、刀子、小形鋌、須恵器甕（第 2 図）、円筒・形象埴輪片が出土した（南河内町史編さん委員会 1992）。

下野市石橋・薬師寺地域の首長墳が、石橋横塚古墳（墳長 75m・6 世紀後葉）→御鷲山古墳（墳長 85m・6 世紀末～7 世紀初頭）→下石橋愛宕塚古墳（墳径 82m・7 世紀初頭）→多功大塚山古墳（辺長 53.8m・7 世紀中葉）→多功南原 1 号墳（辺長 25m・7 世紀末）の順に造られたことでは、意見が一致している（秋元 2015a, 小森 2015, 栃木県考古学会 2016, 佐藤 2019）。ただし、半世紀の年代差がある愛宕塚と大塚山の間系譜関係がない可能性も考えられている（小森 2015, p.107; 佐藤 2019, p.92）。一方、広瀬和雄は、御鷲山と石橋横塚の築造順序を逆に考えている（広瀬 2019, p.375）。下野薬師寺のすぐ北に所在する御鷲山古墳



第1図 御鷲山古墳の墳丘復元図と横穴式石室



第2図 御鷲山古墳の副葬品と須恵器破片

の被葬者は、薬師寺を造営した氏族の始祖的存在として顕彰される存在で、初代下毛野国造の可能性が高いとみる意見がある（若狭 2018, pp.293-295）。

御鷲山古墳の馬具と小札甲を、後期第 4 段階（須恵器の TK209 型式並行期）に筆者は位置付けた（内山 2011, p.60）。そして、「下野市御鷲山古墳に緘孔 2 列の円頭形小札があり、幅が狭くて下捌孔 2 個の小札が認められるので「小針鎧塚型」の新段階に該当する。石橋横塚古墳と同様に緘孔 1 列の偏円頭形小札も含むと考えられる」と紹介した。”小針鎧塚型の小札甲で、下捌孔 2 個の小札を含む”というこの認識は誤りで、今回の報告で訂正する。御鷲山の円頭形小札は、富木車塚型か金鈴塚型（清水 1993）の新段階で、甲本体の小札の下捌孔は 3 個である。小札幅が狭いので後期第 4 段階に位置付ける点は、訂正の必要がない。

御鷲山古墳の埴輪について、秋元陽光（2015a, 2015b）は蛍光 X 線胎土分析結果を検討して「非唐沢 A 群」つまり推定宇都宮北部地域産の可能性を示す一方で、群馬県太田市駒形神社埴輪窯跡の分析値と共通する可能性も十分あると述べている（秋元 2015a, p.111）。他の「非唐沢 A 群」よりも御鷲山古墳の埴輪は Sr（ストロンチウム）と Fe（鉄）の分析値が高い。埴輪から下野系須恵器大甕（第 2 図下）へと墳墓祭祀が移ってゆく過渡期の御鷲山古墳に、地元でなく上毛野から埴輪を調達した可能性があるのならば、興味深い（佐藤 2019, p.93）。

2 御鷲山古墳出土小札の概要

御鷲山古墳で出土した鉄製小札は、小札甲の本体部分に使用した鉄製小札と、附属具小札の両者を含む可能性がある。冑の地板や鍔・頬当と確実にいえる小札はない。附属具は複数の種類があり、その中には肩甲（袖甲）も存在するほかに、大形小札を使った附属具もある。

小札は、大きく分けて 3 群、さらに分けると 7 種ある（第 3 図）。主に小札甲の附属具に使う可能性がある緘孔 1 列・偏円頭形小札を 1 群、長 6.4cm で小札甲の本体に使う可能性がある緘孔 2 列・円頭形小札を 2 群、用途不詳の緘孔 2 列・偏円頭形小札を 3 群とした。

1 群は、札幅と使用部位を考慮して中別で 1 類～3 類に分類し、1 類を第 3 緘孔のないもの（a 種）とあるもの（b 種）に細別分類した。2 類と 3 類も、第 3 緘孔の有無で細別分類できるかもしれないが、資料数と残存状況が限られるので不明確である。

2 群は、中別では 4 類に該当し、使用部位を考慮して 4 類 a 種と 4 類 b 種に細別分類した。2 群は小札甲の本体に使う可能性が高いので、2 群の中には 4 類の他に Ω（オメガ）字型腰札や Ω 字型裾札も存在したであろうが、出土した小札数が少ないので確認できない。3 群は、1 点だけ認められた緘孔 2 列・偏円頭形小札で、中別では 5 類に該当する。

分類名称の 1 類 a 種は、頭部形・大きさ・覆輪孔に基づく略称を「偏円 5.2 下孔」とする。他の種も同様の原則で第 3 図のように分類した。

1 類は長 5.2cm で、小札甲の附属具である肩甲に使う偏円頭形小札と見られる。「腕甲」（初村 2015, p.267）や「袖甲」（初村 2018, p.63）とも呼ばれている。2 類と 3 類は、1 類と同様に緘孔 1 列・偏円頭形であることから、小札甲の附属具と推測する（ただし、4 類とは別のもう一領の小札甲の本体部品とみることも、不可能とは言えない）。4 類は、小札甲の本体に使う可能性が高い。5 類は性格不明である。

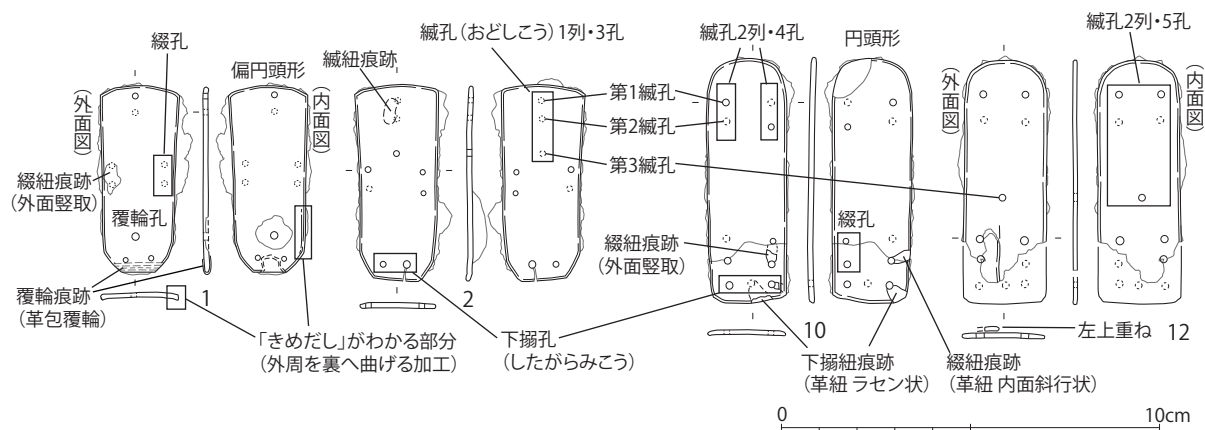
3 1 群小札の特徴（第 5 図 1～9、第 4 図 1・2）

【小札の形状・大きさ】上縁は偏円頭形で、下縁は隅切方形。縦断面形は、裏面方向に緩く反る「撓め」を持つ。

群	1群(緘孔1列・偏円頭形)				2群(緘孔2列・円頭形)		3群(緘孔2列・偏円頭形)
類	1類 (長5.2cm・幅1.9cm)		2類 (幅2.1cm)	3類 (幅2.7cm)	4類 (長6.4cm・幅2.1cm)		5類 (幅1.9cm)
種	a種 (覆輪孔有)	b種 (第3緘孔有)	(第3緘孔の有/無あり?)	(第3緘孔の有/無不詳)	a種 (第3緘孔無)	b種 (第3緘孔有)	
略称	偏円5.2 下孔	偏円5.2 中央孔	偏円 幅2.1	偏円 幅2.7	円頭6.4 中央無孔	円頭6.4 中央孔	偏円 幅1.9
事例							
長・幅 (cm)	長5.1-5.3 幅1.8-2.0		推定長7-8? 幅2.1-2.3	推定長8-9? 幅2.7	長6.4 幅2.1	長6.4 幅2.1	残長4.5 幅1.9-2.0
緘孔	2孔×1列		3孔×1列・ 2孔×1列	3孔×1列 (2孔×1列?)	2孔×2列	2孔×2列 +1孔	3孔×2列?
綴孔	1段(2孔×2箇所)		推定2段(2孔×4箇所)		1段(2孔×2箇所)		1段?
下搦孔・ 覆輪孔	下搦2孔+ 覆輪1孔	2孔	2孔	(残存なし)	3孔		(残存なし)
用途	肩甲(袖甲)		附属具(推定)		甲本体(推定)		不詳
使用 部位	裾札 (最下段)	上段・ 中間段			草摺?	胴部?	

0 10cm

第3図 御鷲山古墳出土小札の分類 (S=1/2)



第4図 小札の部位と付着痕跡の用語説明 (S = 1/2)

両側と頭部の縁を裏面側に曲げる「きめだし」が1と4で観察できる。サビが少なければ他の個体でもきめだしが観察できるであろう。底部を表面側に曲げる「打ち返し」は不明確で、2は弱く打ち返ししているかもしれない。大きさは分類図に示した。札の厚さは1.0～1.5mm前後で、8は下部がやや厚めである。

【**緘孔の列と数**】緘孔1列で、2孔×1列が多い。1類b種(2)と2類(8)は第3緘孔を持つ3孔×1列になる。X線写真を撮影していないので、第3緘孔が錆で隠れている場合があるかもしれない。2類と3類には、1類a種のように、第3緘孔がない裾札を含むかもしれないが、はっきりしない。

【**小札の重ね方向**】肩甲(袖甲)の裾札である1類a種の個体(1)は右上重ねである。附属具の可能性もある2類(4)で右上重ねを確認できる。実際は左上重ねもあり、その痕が確認できないだけかもしれない。3類(9)は、裏面頭部の有機質からみて左上重ねか、または右上重ねの左端小札の可能性もある。

【**緘法**】1類は緘孔の外面に紐痕跡が残るが(2)、材質が革紐かどうかははっきりしない。緘法の詳細がわかる資料はない。1類a種(1)と1類b種(2)は、各段緘b類(清水1990・1993)で上下に連結するであろう。第6図左の肩甲復元図は緘紐を列ごとに1条で復元したが、2条の場合もありうる。1類a種は裾札つまり最下段なので、下段へ連続する第3緘孔がない。2類のうち第3緘孔を確認できる8は各段緘b類になる。2類の残りと3類は、現状で第3緘孔を確認できない。第3緘孔部分が破損し残っていない、あるいは錆で隠れている場合があるかもしれない。

【**横綴法**】小札の左右各2孔を使って、革紐で綴じる。1類は外面で縦方向(堅取)の綴紐痕跡がある(1)。2類は内面で鋸葉状になる革紐痕がある(4)。

【**下搦み**】下搦孔は2孔ある。2類の小札は、下搦孔に革紐をラセン状に巻く(7)。孔の間隔からみて、下搦紐を2本ではなく1本使って巻くのだろう。これを参考にして、1類b種の小札もラセン巻に復元した(第6図左)。

【**下縁覆輪・側縁覆輪**】小札甲の附属具である肩甲(袖甲)の裾札である1類a種の下部中央にある1孔の覆輪孔を使って、下縁に革包覆輪を付けると推定できる。表裏両面の下縁に革包覆輪の痕跡が残る(1)。覆輪を縫い付ける紐は残っていない。第6図左下の縫紐は想定案の一例である。1類a種小札は、下縁に2孔の下搦孔も持つので、下搦紐をラセン状に巻いた上に覆輪をつけたのかもしれないが、1の下搦孔には下搦紐が残っていない。側縁覆輪が確認できる個体はない。

【1群の小札の観察】

1群1類a種(第4・5図1) 略称＝偏円5.2下孔

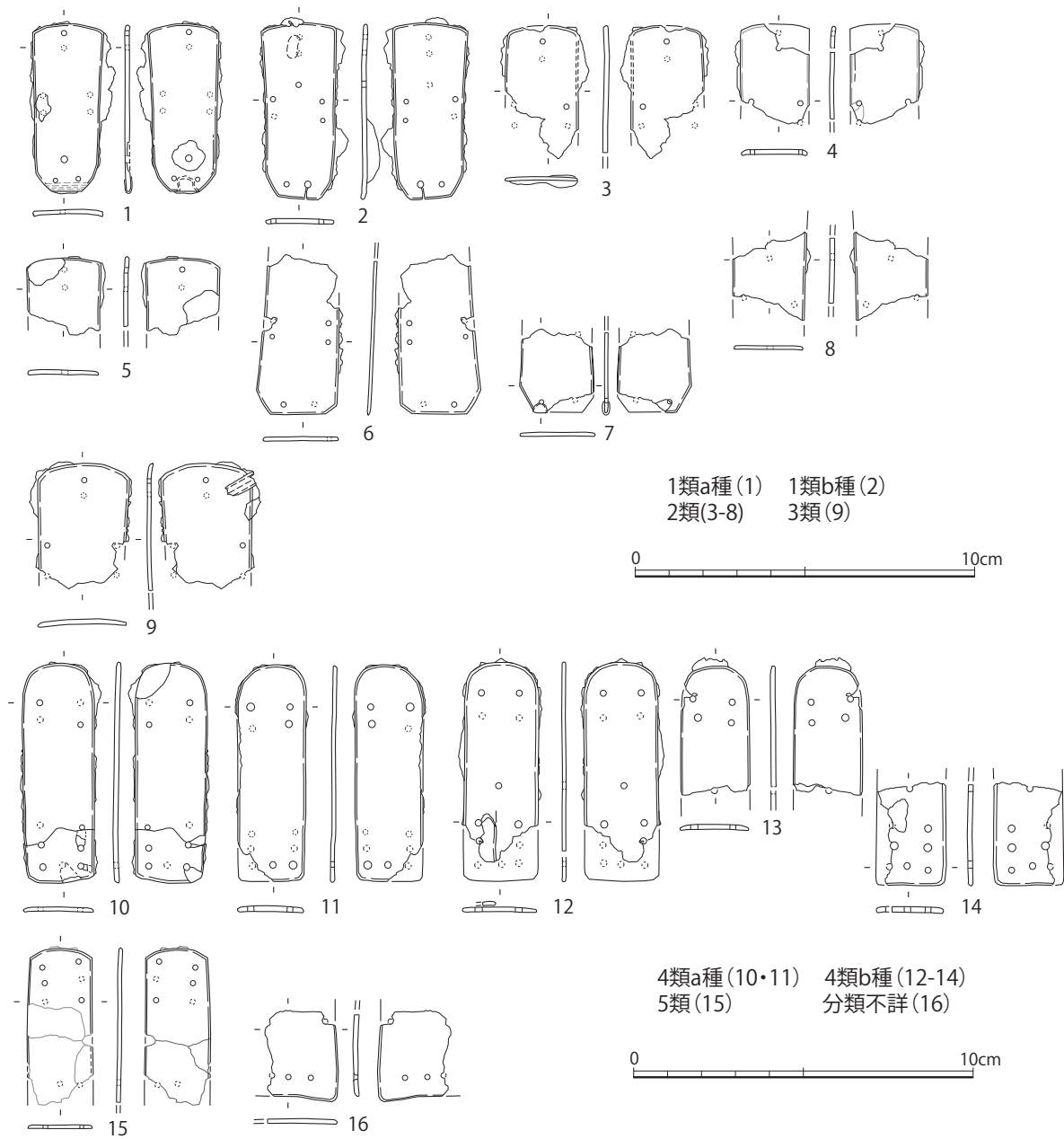
1類a種は、肩甲(袖甲)の最下段小札である。横幅21mm(上部)・18mm(下部)。下部中央にある覆輪孔は直径2mmで、下縁にある直径1.5mmの下搦孔よりも径が大きい。裏面の右側縁下部できめだしを観察できる。覆輪孔周辺の裏面が剥離破損する。内外面下端の革包覆輪痕と、表面左側縁に縦位に残る材質不詳の綴紐痕からみて、右上重ねである。1は1992年の『南河内町史』での報告番号12番で、重さ5.23g。

1群1類b種(第4・5図2) 略称＝偏円5.2中央孔

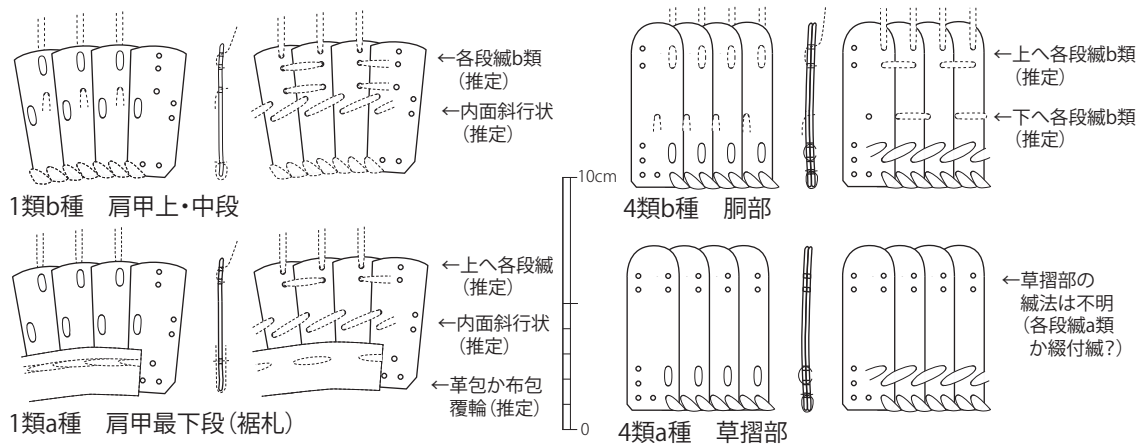
1類b種は、肩甲(袖甲)の上・中段小札である。横幅22mm(上部)・19mm(下部)。中央上部に第3緘孔を持つ。材質不詳の緘紐痕が表面頭部に縦位に残る。2は1992年報告番号13番で、重さ7.31g。

1群2類(第5図3～8) 略称＝偏円幅2.1

2類も附属具小札の可能性がある。上部横幅21mm(3～5)・下部横幅24mm(6・7)。X線撮影をしていないこともあって、第3緘孔を確認できたのは8だけである。8は、1群2類か、2群4類b種か分類に



第5図 御鷲山古墳出土小札 (S=1/2)



第6図 御鷲山古墳出土小札の緘法・綴法 (S=1/3)

迷う破片で、側縁から綴孔までの距離が近い点から 1 群 2 類の破片と判断した。7 は革紐の下拵が残る。

3 は旧報告 25 番で、残存重量 5.01g。4 は旧報告 23 番で、残存重量 2.82g。5 は旧報告 20 番で、残存重量 2.75g。6 は旧報告 16 番で、残存重量 4.76g。7 は旧報告 22 番で、残存重量 2.26g。8 は旧報告 24 番で、残存重量 2.85g。

1 群 3 類 (第 5 図 9) 略称 = 偏円幅 2.7

3 類も附属具小札の可能性はある。上部横幅 27mm。破損している下部に第 3 綴孔を想定できる (第 3 図)。9 の裏面頭部右側には繊維状の有機質が錆び着く。9 は 1992 年報告番号 17 番で、残存重量 5.13g。

4 2 群小札の特徴 (第 5 図 10 ~ 14、第 4 図 10・12)

【小札の形状・大きさ】上縁は円頭形で、下縁は方形。縦断面形は、裏面方向に緩く反る「撓め」を持つ。裏面外周の「きめだし」や、底部を表面側に曲げる「打ち返し」は現状では認められない。大きさは小札分類図 (第 3 図) に示した。札の厚さは 1.0 ~ 1.5mm 前後で、1 群よりもわずかに厚めの傾向がある。2 群には 4 類の他に腰札や裾札も存在したと考えるが、残存出土枚数が少なく確認できない。

【綴孔の列と数】綴孔 2 列である。4 類 a 種 (10・11) は綴孔 2 孔×2 列 = 4 孔、4 類 b 種 (12 ~ 14) は綴孔 2 孔×2 列 + (第 3 綴孔) 1 孔 = 合計 5 孔である。

【小札の重ね方向】草摺小札の可能性のある 4 類 a 種 (10) と、胴部小札の可能性のある 4 類 b 種 (12) で、左上重ねを確認できる。右上重ねも行っているが痕跡が確認できないだけか、あるいは失われた小札に右上重ねがあったかもしれない。

【綴法】2 群の綴紐の材質は不明である。綴法痕跡がわかる資料もないが、4 類 b 種 (12・13・14) は、第 3 綴孔があるので、各段綴 b 類 (清水 1990・1993) であろう。第 6 図右上は、綴孔 1 列あたり綴紐 1 条の案を想定して復元した。4 類 a 種 (10・11) は、第 3 綴孔がないので、各段綴 a 類または綴付綴と考えることができる (第 6 図右下)。

【横綴法】外面で縦方向 (堅取)・内面で斜行状になるように革紐で綴じ、小札下位の左右各 2 孔を使う (10)。

【下拵み】下拵孔は 3 孔ある。4 類 a 種の小札は、下縁にある 3 孔の下拵孔に、革紐をラセン状に巻く (10)。下拵紐を 1 本使って巻いているのか、2 本を使ってそれぞれ 1 孔とびに巻いているのかは、よくわからない。

【下縁覆輪・側縁覆輪】Ω字型裾札のような、最下段の小札が出土していないので、下縁覆輪の状況は不明である。失われた小札に、下縁覆輪をつける裾札があったと推定できる。側縁覆輪は確認できない。

【2 群の小札の観察】

2 群 4 類 a 種 (第 5 図 10・11) 略称 = 円頭 6.4 中央無孔

第 3 綴孔がない小札を、小札甲の草摺部に使う可能性が高い (清水 1990, p.371; 清水 1993, p.17)。長さ 64mm (11) ~ 65mm (10)、横幅 21mm。10 の革綴紐と下拵革紐 (第 4 図 10) は、上の【綴法】と【横綴法】の項で説明した。10 の裏面頭部左上は剥離破損している。10 の下端部破片が旧報告 18 番で、10 全体の重量は 7.17g。11 は旧報告 9 番で、残存重量 7.36g。

2 群 4 類 b 種 (第 5 図 12 ~ 14) 略称 = 円頭 6.4 中央孔

第 3 綴孔があるので、小札甲の胴部に使う可能性が高い (清水 1990, 清水 1993)。推定復元長 64mm、残存長は最大で 59mm (12)、横幅 21mm で、12 は最大幅 22mm の部分がある。12 は旧報告 10 番で、残存重量 6.24g。13 は旧報告 14 番で、残存重量 3.55g。14 は旧報告 19 番で、残存重量 2.51g。

	絨孔2列円頭形小札（小札甲の本体）		絨孔1列偏円頭形小札（小札甲の附属具）
埼玉県 小針鎧塚	腰札 草摺 胸部 絨6孔 A1 A2 A3 小札甲A（札幅27mm） 胸部 絨4孔 B1 B2 B3 小札甲B（札幅17mm）	大形小札の附属具 長6.0cm 肩甲小札 長4.8cm 肩甲の復原図	
栃木県 石橋横塚	腰札 草摺部 絨4孔 胸部 絨6孔 草摺裾	肩甲の復原図 小札長5.0cm 小針鎧塚古墳: 船山政志・塚田良道 1991『行田市郷土博物館研究報告』2 横塚古墳: 石橋町史編さん委員会 1984『石橋町史』第一巻 史料編(上) (石橋横塚古墳の肩甲復原図は内山作成) 城山1号墳: 千葉県史料研究財団 2004『千葉県の歴史』資料編 考古4 割地山古墳: 太田市教育委員会 2000『市内遺跡』XVI	
千葉県 城山1号	腰札 草摺部 絨4孔 胸部 絨6孔	手甲 長3.5cm-3.8cm 長4.3cm 長4.9cm 大形小札の附属具 長7.4cm 長7.8cm 長8.4cm-A 長8.4cm-B 長9.3cm	
栃木県 御鷲山	胸部 絨5孔 草摺部 絨4孔 腰札および草摺裾札は不明	大形小札の附属具 推定長7-8cm 大形小札の附属具 推定長8-9cm 肩甲小札 長5.2cm (裾札) (上・中段)	
群馬県 割地山	腰札 推定草摺 絨5孔 胸部 絨6孔 草摺裾	大形小札の附属具 長7.5cm 0 20cm	

第7図 2列円頭形の小札甲に1列偏円頭形の小札附属具が伴う事例 (S=1/4)

5 その他の小札など（第5図15～16）

3群5類（第5図15）略称＝偏円幅1.9

偏円頭形で臑孔2列の小札はこの1点だけしか認められないので、用途や部位もよくわからない。臑孔が3孔×2列の可能性がある。15の破片下部は、記入した2孔だけしか確認できず、綴孔を含む可能性があるが不明確である。15は旧報告15番で、残存長45mm、幅19mm、残存重量3.46g。

詳細不明の破片（第5図16）

16はあまり小札ふうに見えない遺物破片である。胃の地板破片などであるのかどうか、はつきりしない。旧報告の21番で、残存長27mm、残存幅22mm、残存重量2.38g。

6 位置づけ、組み合わせの性格

【位置づけ】御鷲山古墳の小札甲は、臑孔2列5孔の小札を胴部に使う富木車塚型か金鈴塚型（清水1993）の可能性が高い。小札幅が狭いので、その新段階に該当し、後期第4段階に位置付けられる（内山2006・2021）。

【分布】北関東西部の栃木・群馬や埼玉北部では、胴部臑孔6孔の小針鎧塚型が多くて、胴部臑孔5孔の富木車塚型と金鈴塚型は少ない。群馬県伊勢崎市古城稲荷山古墳に後期第3段階の富木車塚型がある（東京国立博物館1983）。胴部臑孔5孔の型式は、東海から東関東、つまり静岡・神奈川から千葉・茨城県域に多い（田邊2020、内山2019b・2021）。

【製作者】胴部臑孔の数が、工人集団に対応する可能性が議論されている（清水1990, p.15; 田邊2020, p.28）。一方、胴部臑孔5孔と6孔の差ではなくて、臑法で類型を認識して製作集団を推定する作業も進められている（横須賀2021, p.347）。孔数は小札製作、臑法は甲の組立てという、それぞれ別の側面を反映するのかもしれない（内山2021, p.163）。御鷲山の小札甲は、草摺部の臑法が不明である。草摺が各段臑a類であれば横須賀のAII類型、草摺が綴付臑ならばAIII類型になる。

【組み合わせ】御鷲山古墳では、倭系の小札甲（2群）に、外来系の小札附属具（1群）が伴う。日本列島で古墳時代中期後葉以後に定型化した倭系の臑孔2列円頭形小札を小札甲本体に使い、古墳後期第2段階（須恵器のMT85段階-TK43型式期、6世紀後葉：内山2006）に朝鮮半島から導入した外来系の臑孔1列偏円頭形小札を附属具に使う組み合わせであろう。

このような事例を、横須賀倫達（2011, pp.15-17, 18）や初村武寛（2018, p.63）が検討している。

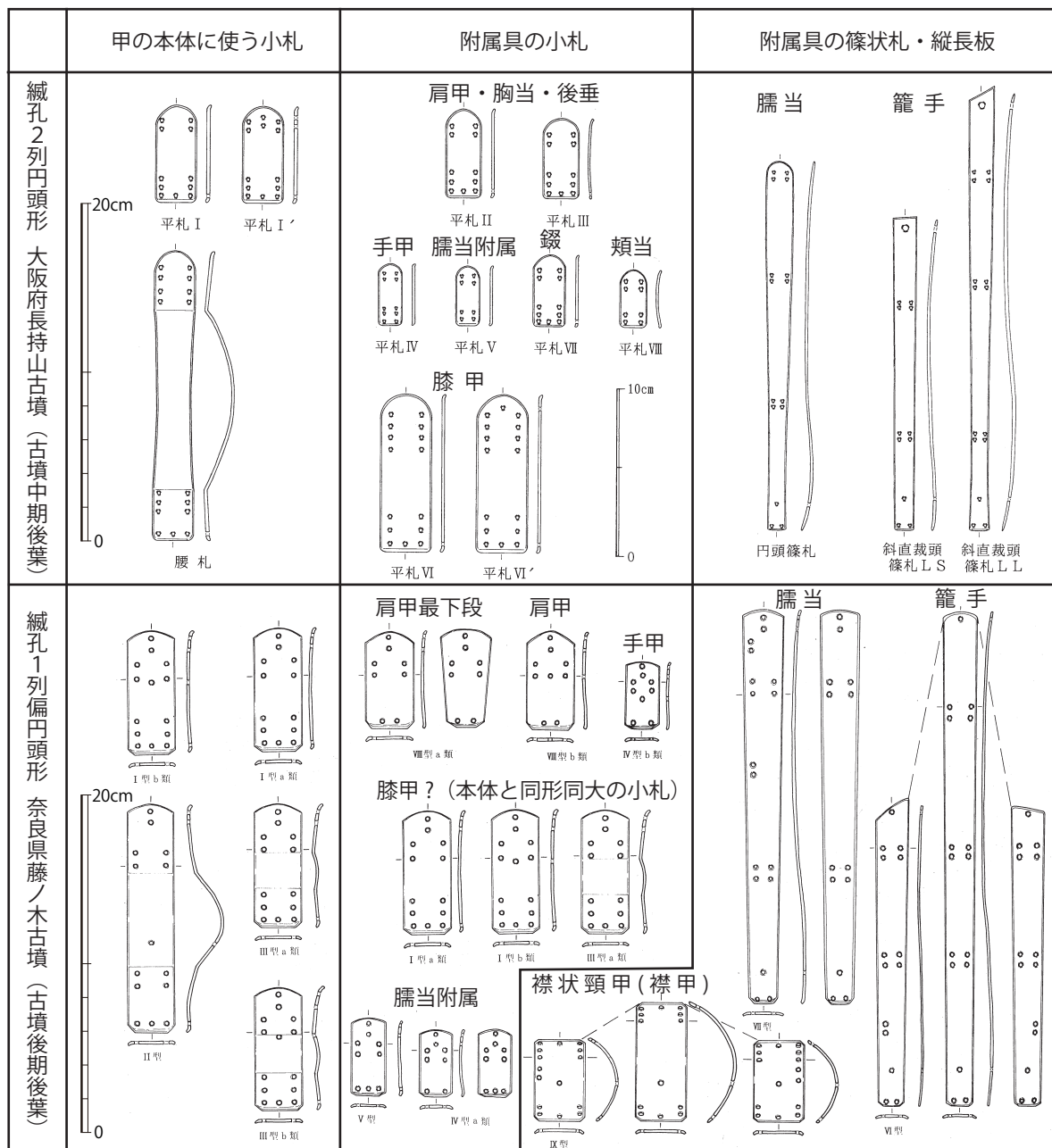
横須賀（2011）は、臑孔1列偏円頭形小札の附属具について、千葉県城山1号墳と群馬県割地山古墳で膝甲、埼玉県小針鎧塚古墳で上幅の広い小札が肩甲と推定・報告されていることを紹介・指摘した。臑孔2列の小札甲に、臑孔1列の小札附属具が伴う例として、城山1号・割地山・小針鎧塚古墳のほかに、大阪府峯ヶ塚古墳と福島県山崎9号横穴墓を挙げた。

初村（2018）は、臑孔1列の小札が襟状頭甲（襟甲）とともに朝鮮半島系であることを指摘し、臑孔1列小札の肩甲を意図的に偏重したと考えた。「肩甲の可能性の高い小札を挙げていくと、威孔1列小札が多いように思われる……（中略）……襟甲が元々朝鮮半島などで用いられていたもので、それに伴う肩甲が威孔1列であったことに起因するのだろうか。そういった痕跡を残しているのであれば、意図的に小札肩甲を偏重した事例として興味深い。」「日本列島内の襟甲付属肩甲の編年観としては、小札肩甲導入後の円頭威孔1列→日本列島内定型化後の円頭威孔2列→6世紀の新式甲冑導入時の偏円頭威孔1列という流れが想定される」

と述べている。

倭系の緘孔2列円頭形小札を小札甲本体に使い、外来系の緘孔1列偏円頭形小札を附属具に使う古墳後期後半の代表的な事例を第7図に示す。小針鎧塚は甲冑編年（内山2006）の後期第2—第3段階、石橋横塚・城山1号墳は第3段階、御鷲山・割地山は第4段階に相当する。後期第4段階の埼玉県小見真観寺古墳でも、1列偏円頭形と2列円頭形の小札甲に、1列偏円頭形附属具の肩甲や篠状鉄札が伴う（末永1934）。1列偏円頭形小札の残存出土数が1片だけの福島県山崎9号横穴墓（横須賀2011）や茨城県赤羽B-1号横穴墓（鈴木・片平1987）の場合には、小札の転用・流用・修理を考えることもできる。

御鷲山古墳の外来系附属具小札には、小形で下幅が狭い肩甲小札（1類）のほかに、緘孔1列偏円頭形の大形小札（2類と3類）がある。この大形小札は、小針鎧塚・城山1号・割地山の事例に対比できる。小札



第8図 本体と附属具に同種小札を使う組み合わせ（上は2列円頭形 下は1列偏円頭形 S=1/4）

上段：塚本敏夫 1997 「長持山古墳出土掛甲の研究」『王者の武装』京都大学総合博物館

下段：清水和明 1990 「掛甲と付属具」『斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会

の総数や全体構造がわからない中で、不確実ではあるが推測するなら、御鷲山古墳でも大形小札の附属具に膝甲を含む可能性がある。

古墳中期からすでに定型化している倭系の小札甲とともに、外来系附属具の肩甲や膝甲も着用する組み合わせには、どのような背景があるのだろうか。(1) 倭系と外来系の小札製作者が倭に存在し、それぞれ甲や附属具を供給していた〔＝製作者集団の違い・渡来系工人〕。(2) 倭製小札甲に舶載附属具を組み合わせる流通や使用が行われていた〔＝輸入品や対外関係〕。(3) 外来系附属具使用者の、朝鮮三国時代の社会に関わる軍事的役割を反映する〔＝使う人物の性格〕……など、多様な解釈が考えられる。倭系の2列小札甲に、朝鮮半島系縦長板冑を組み合わせる事例がしばしばみられること(内山 2019a, 内山 2020)と共通する背景があるかもしれない。外来系1列偏円頭小札武具の倭製化は後期第2段階の藤ノ木古墳例(第8図下)からすでに行われているので、倭製品と舶載品の区別を検討しながら、これらの問題を考えてゆく必要がある。

おわりに

御鷲山古墳出土小札は、市町村合併前の南河内町教育委員会の依頼により、栃木県埋蔵文化財センターで車塚哲久氏が鋳除去を行った。資料を調査・報告できたのは、下野市教育委員会、山口耕一氏、石橋町星宮神社の御協力による。また、報告文について横断研究会の皆様から御意見をいただいた。御協力をいただいた方々に御礼を申し上げます。

(参考・引用文献)

- 秋元陽光 2015a 「胎土分析から見た栃木の埴輪 2- 栃木県南部における大型古墳の埴輪 -」『栃木県考古学会誌』第 36 集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.103-116
- 秋元陽光 2015b 「胎土分析から見た栃木の埴輪」『埴輪研究会誌』第 19 号 埴輪研究会発行 小金井, pp.19-36
- 内山敏行 2004 「第 4 節 古墳時代 2 遺物 (11) 武具」『千葉県の歴史』資料編 考古 4 千葉県発行, pp.832-843
- 内山敏行 2006 「古墳時代後期の甲冑」『古代武器研究』第 7 号 古代武器研究会 彦根, pp.19-28
- 内山敏行 2011 「栃木県域南部の古墳時代馬具と甲冑」『しもつけ古墳群 - 下野の霸王、吾妻ノ岩屋から車塚へ -』壬生町立歴史民俗資料館 壬生(栃木県下都賀郡), pp.58-64
- 内山敏行 2019a 「衝角付冑と 2 列小札甲 - 古墳時代甲冑のセット関係 -」『和の考古学—藤田和尊さん追悼論文集—』ナベの会考古学論集 第 1 集 ナベの会 御所, pp.175-184
- 内山敏行 2019b 「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学別冊 30 雄山閣 東京, pp.65-78
- 内山敏行 2020 「綿貫観音山古墳の甲冑と附属具」『綿貫観音山古墳のすべて』群馬県立歴史博物館 高崎, pp.173-179
- 内山敏行 2021 「後賀中割遺跡 8 号墳の小札甲と関連資料」『後賀中割遺跡 (T007 遺跡)』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 698 集 渋川, pp.162-167
- 小森哲也 2015 『東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究』六一書房 東京, pp.57,68,69,107
- 齋藤恒夫 2000 「栃木県の前方後円墳ノート 2- 御鷲山古墳の外形復元 -」『栃木県考古学会誌』第 21 集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.91-100
- 佐藤渉 2019 「しもつけの大型古墳と須恵器甕 - 古墳時代終末期の墳丘儀礼 -」『栃木県考古学会誌』第 40 集 栃木県考古学会 宇都宮, pp.79-95
- 清水和明 1990 「挂甲と付属具」・「挂甲」『斑鳩藤ノ木古墳 第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会(奈良県生駒郡), pp.43-82,362-375
- 清水和明 1993 「挂甲 - 製作技法の変遷からみた挂甲の生産 -」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第 33 回埋蔵文化財研究集会 宮崎, pp.13-27



写真1 御鷲山古墳出土小札（左：表面 右：裏面）



遺物1 表面左側の綴紐痕?
材質不詳



遺物2 表面頭部の緘紐痕?
材質不詳



遺物7 表面底部の下搦紐
革紐によるラセン状



遺物9 裏面頭部の有機質
繊維状の痕跡が見える



遺物1 表面底部の覆輪痕
革包覆輪または横方向の繊維状



遺物4 裏面左側の綴紐痕
革紐による鋸歯状



遺物10 表面底部の革紐痕
綴紐とラセン状下搦紐



遺物10 裏面底部の革紐痕
斜行状綴紐とラセン状下搦

写真2 御鷲山古墳出土小札の細部痕跡

- 末永雅雄 1934『日本上代の甲冑』岡書院 東京, pp.44, 104, 108-110, 298-299, 第 47 図, 図版 33, 37, 42
- 鈴木裕芳・片平雅俊 1987『赤羽横穴墓群-B 支丘 1 号墓の調査-』日立市教育委員会 日立, pp.39-42
- 田代隆・小森哲也 1984「横塚古墳」『石橋町史』第一巻 史料編(上) 石橋町(栃木県下都賀郡), pp.56-108
- 田邊凌基 2020「古墳時代後期の小札甲にみる地域性-緘孔 2 列 5 孔型小札の導入の様相-」『遡航』第 38 号 東京, pp.21-30
- 東京国立博物館 1983『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東Ⅱ) 東京, p.44
- 栃木県考古学会編 2016『とちぎを掘る-栃木の考古学の到達点-』随想舎 宇都宮, pp.163, 183
- 初村武寛 2015「東大寺金堂鎮壇具挂甲残闕を再考する」『国宝 東大寺金堂鎮壇具 保存修理調査報告書』東大寺 奈良, pp.263-272
- 初村武寛 2018「小札式甲冑の研究史と導入・展開期の諸様相」『古代武器研究』Vol.14 古代武器研究会・山口大学人文学部考古学研究室 山口, pp.47-76
- 広瀬和雄 2019「第 7 章 古墳時代の「国境」 第 2 節「山陽道」の政治センター (3) 兵站としての東国」『前方後円墳とはなにか』中公叢書 中央公論社 東京, pp.370-380
- 船山政志・塚田良道 1991「小針鎧塚古墳の挂甲」『行田市郷土博物館研究報告』第 2 集 行田, pp.1-30
- 南河内町史編さん委員会(山ノ井清人・水沼良浩) 1992「御鷲山古墳」『南河内町史』史料編 1 考古 南河内町発行(栃木県河内郡), pp.461-493, カラー口絵 18-20
- 谷津浩司・坂庭秀紀 2000「東矢島古墳群(割地山古墳)」『市内遺跡』XVI 太田市教育委員会, pp.3-48
- 横須賀倫達 2011「山崎横穴古墳群出土小札甲の調査と研究」『福島県立博物館紀要』第 25 号 会津若松, pp.3-23
- 横須賀倫達 2021「仕様と系列から後期型小札甲を考える」『古墳文化基礎論集』古墳文化基礎論集刊行会 富田林, pp.343-352
- 若狭徹 2018「東国における後期古墳の特質-前方後円墳の終焉-」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会実行委員会編集発行 静岡(同 2021『古墳時代東国の地域経営』吉川弘文館 東京, pp.279-295 に再録)